



調理室からは、手際よく野菜を切る音とともに、和やかな会話も聞こえてきます。住民からも、この時ばかりは日常が戻ってきたかのような笑顔がこぼれます



写真左から、「だんだん食堂」(麩島町)代表の穴井智子さん(55)、「陽だまりの樹」(東区)代表の堤雅さん(43)、竹下紀子さん

特集  
女性の活躍

# ネットワークの裾野を広げ 誰一人取り残さない “また来たい”場所へ



竹下紀子さん(58)  
1962年、長崎県生まれ。2013年、長年看護師として勤務した産婦人科を退職し、育児で孤立しがちな母親を支援する子育てサークルを立ち上げる。その後地域の縁側として活動を続け、2016年「子ども・地域食堂 おうち食堂竹ちゃん」を発足。2020年8月、熊本県子ども食堂ネットワークの役員会会長に。同年、IHigoROCKalアワードファイナリスト。

※子ども食堂とは…民間発の自主的・自発的な取り組みで、無料または低額で食事を提供する場です。開催頻度や対象者など、運営形態は主宰団体により異なります。

も研修などで学びを深める機会が増え、共に成長し合い、新たな可能性を見出すきっかけにつながっています」

### ネットワークがあるからこそ できる継続支援

令和2年7月豪雨災害発生後、各子ども食堂には、全国から善意の義援金が集まりました。「二人での活動は難しいですが、ネットワークがあるからこそできる」。参加可能な人を募り、人吉サンホテル前で100食分の炊き出しを実施。その後も月1回人吉や芦北で活動を続け、温かい食事を届けました。

同年11月末には、八代市の坂本ハブセンターで、子ども食堂3団体のメンバーと地域住民を交えての炊き出しを実施。竹下さんは、「私たちの支援は、あくまで地域の方々が自分たちの生活を取り戻すまでのお手伝いなのです」と強調します。「自宅は床上浸水で、どうにか住める状態になりましたが、まだまだ以前のような生活には戻れなくて」と肩を落とす高齢者も。水害に加え、コロナの影響もあり、祭りや老人会の集まりも中止に。「地域のコミュニティそのものがなくなりつつあり、家に引きこもってしまう方も多いため、竹下さんは訴えます。

炊き出しは、生活復旧を食から支える支援であると共に、人々が集い、語り合う場の提供でもあります。「炊き出しがある日を指折り数えて待っています

は」と当時を振り返ります。

### “資金人、物資”の課題を共有し、 負担を軽減するために

地域に開かれた子ども食堂。その運営において各所が抱える課題が、活動資金、人的サポート、そして食材などの支援物資の調達です。「当初は、知り合いや支援者から物資や支援金をお預かりし、やりくりをするという日々でしたが、利用者が多くなると、どうしても底をついてしまいます。これは私だけでは、どの運営者も活動を継続する上で、同じ問題を抱えていました」と竹下さん。自身は資金を捻出するため、仕事である手作りパンの売り上げの一部を運営費に充てているといいます。

今後永続的に活動するには、「これらの課題や情報を共有し、同じ思いを持つ者がしっかりと手を取り合うことが必要」と2020年8月、県内35団体の子ども食堂をつなぐ「熊本県子ども食堂ネットワーク」が発足しました。

「一般社団法人になったことで活動内容も明確になり、支援への協力依頼もしやすくなりました。また私たち自身



たと、かき揚げうどんを食べながら、話が弾む高齢者たち。今後は「これらを地域住民で運営していけるようノウハウを伝えていくのも、私たちネットワークの役目」と竹下さんは語ります。

### 100カ所の子どもの食堂をつなぐ支援の輪を広げたい

子ども食堂は、当初は貧困を抱える親子が集う居場所というイメージが先行し、利用しにくいという声もありました。「本来、地域に開かれた場所ので、年齢や性別に関係なく、誰もが気軽に集える場所であるはず」と竹下さん。「今は活動するのは女性がほとんどですが、ここに男性のマンパワーが加わることで、地域の力も強くなり、災害時の支援拠点としての役割も果たせる組織になる」と力を込めます。

2020年10月には県ひとり親家庭福祉協議会等と共同で「子ども見守りネットワークプロジェクト」もスタート。竹下さんらが個人で始めた「点」の活動が、県内の子ども食堂をネットワークでつなぐことで「線」の活動になり、さらに行政や協賛団体などの協力を得ながら、県全体を「包み込む」活動になることに期待が寄せられます。「みんながまた来たいと思える場所にしていきたい」。拠点となる「子ども食堂100カ所をつなぐこと」を目標に、誰一人取り残さない「食」を通じた支援の輪が広がっています。



◀坂本ハブセンターの炊き出しに集まる住民  
▼令和2年7月豪雨災害後の炊き出しの様子



熊本県子ども食堂ネットワークの拠点で行われた  
会員向け料理教室の様子



▶親子が集う「子ども食堂」  
▼掘った芋は、子どもたちがそれぞれ持ち帰り、一部は子ども食堂の食材としても使われています

